

Izumi KATO

Casa Brutus,
日本の現代アート名鑑100

April 2022

島根県生まれ。東京と香港に拠点。人型ではあるが、人間のみならず自然、動物、精霊等イメージが広がるモチーフの油彩画および木彫等の立体を制作。主な個展に、『加藤泉— LIKE A ROLLING SNOWBALL』(ハラミュージアム アーク/原美術館、2019年)など。2022年は、『ハワイ・トリエンナーレ2022』(～5月8日)に参加、6月には『A SUMMER IN LE HAVRE』(フランス)に参加予定。

東京都内にある加藤のアトリエ。背後の本棚には、彫刻の素材として用いるための古いプラモデルの箱やレコードが並んでいる。

023 STUDIO VISIT ⑤ IZUMI KATO

加藤泉 (1969-)

絵画や彫刻の中に存在する、「ひとがた」の持つ想像力。

加藤泉がアーティストとして活動し始めたのは30歳の頃。当時から変わらず人型のモチーフを描き続けている。題材が変化しても描くものは変わらない、加藤泉の25年間の軌跡。

photo_Satoshi Nagare
text_Keiko Kamijo editor_Jun Ishida



1 アトリエの本棚には石ノ森章太郎、手塚治虫、諸皇大二郎の漫画の他、鳥類、魚類、両生類等古い原色図鑑のシリーズが並ぶ。2 加藤がジャケットの絵を手がけた学生時代にやっていたバンドHAKAIDERSのLP盤。バンドメンバーが持っていた音源からレコードを発売した。3 アトリエの作業場には画材や道具の他にフィギュアやプラモデル、ドラムセットなどが置かれている。

見る者が想像を広げてしまう、色とかたち。

目

の前にいるひとのよう
なものは果たして人間
なのか。幼児のように
も見え、古い遺跡から発掘さ
れた精霊のようにも、はたまた異
星人のようにも見えてくる。加藤

泉の絵画や彫刻に登場するモチー
フは、大きくは変わることがない。
頭部または全身が、様々な色で描
かれ、立体となり、空間に配置さ
れている。見る者によって様々な
解釈が生まれる像を生み出す加藤

の創作の源泉について聞いてみた。
島根県の自然豊かな町に生まれ
た加藤は、少年時代はもっぱら野
山を駆けずり回り、釣りをする活
動的な子どもであった。器用な手
先を活かし釣りの仕掛けや遊び道
具などは自分で作る。おもちゃも
そこまで多くはなく、ゲームもな
い、当時の子どもたちはみんなク
リエイティブだったと加藤は言う。

しかし、田舎での暮らしも年を
重ねるにつれてだんだんと飽きて
きた。高校卒業後の進路も考えね
ばならぬ時期だ。そんな時に出会っ
た教育実習の先生から絵を褒めら
れ、美大を勧められた。試しに一
度、東京の予備校へ行ってみると、
そこには違う世界が広がっていた。

「当時はインターネットもなくて、
高校に行っても真面目なヤツかヤ
ンキーしかいない。予備校に行っ
たらヘンなヤツがたくさんいて、
とにかくカルチャーショック。も
のすごく楽しかったです。美術
が好きとか絵がうまいというより
も、田舎を出て東京の美大に行き
たい!と思った」と加藤。

武蔵野美術大学の油絵学科に無
事合格し、憧れの美大生活が始ま
ったが、もともとアートに興味が
あったわけではない加藤は、大学

の授業もそこそこ仲間とのバン
ド活動に没頭する。毎日スタジオ
に入って練習をし、ライブハウス
でライブをし、ツアーにも出たり
と活動はかなり本格的だ。美大で
学んだことは自慢できるようなも
のではないが、専攻を超えた同世
代の友人たちに出会えたのは何よ
りもの財産。加藤は文字通りの健
康な青春を謳歌していた。

大学卒業後は肉体労働をしなが
らバンド活動をしていたが、やがて
休止。年に1度ほど貸し画廊で個
展を開いたりもしたが、あまり力
が入っていただけではない。でも
絵画への興味が失せたわけではな
く、ギャラリーの側を通ると覗き
たくなる。そんなモヤモヤとした
日々が数年が続いたが、30歳を目
前に奮起する。加藤はこう話す。

「まあ、単に大人になっただってこ
となんだと思うんですけど(笑)。
周囲にいたお酒を飲んでクダを巻
くような大人には絶対になりたく
ないと思っただけです。一度真剣に
美術に取り組んでみて、ダメだっ
たらそれでいいじゃないかと思
い、仕事を辞めて勝負に出ました」

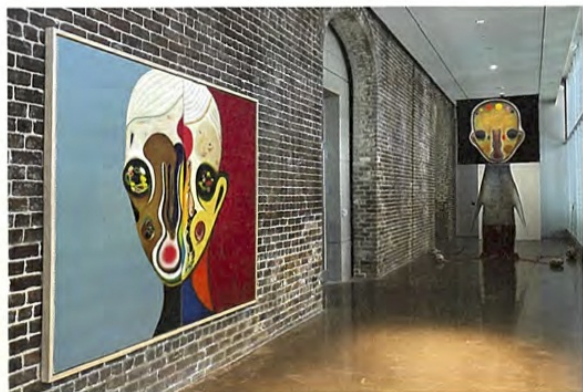
師となる人はいなかった。教え
を請うたギャラリストもない。
加藤は、直感的に絵は人から教わ
るものじゃないと考えていた。バン
ドでドラムを始めた頃もそう、
誰かに教わったことはない。これ
までの人生で見えてきた絵画や、吸
収したすべての感覚を頼りに自分
にしか描けない絵を追求し、現在
のスタイルに落ち着いてきたという。

「その時、絵を描く道具——キャ
ンパスや絵の具が全部変わりました。
アクリル絵の具を油絵の具に
して、ブラシや筆ではなく手とゴ
ムペラと布を使って描くという。



『加藤泉—LIKE A ROLLING SNOWBALL』
ハラミュージアム アーク (2019)

大きな空間の中に木彫作品とソフトビニール素材の彫刻、奥には大きな布に描かれたひとの作品のインスタレーションが展開された。ステートメントには「人生は転がる雪球のようだ」とある。こちらの会場では25年にもおよぶ加藤の作品の軌跡が展示された。



『Stand by You』
SCAD Museum of Art (2021)

1853年築のレンガ造りの元鉄道施設内にあるミュージアムで開催された展覧会。加藤の作品は見る場所によっても感じ方がかなり変わってくる。歴史ある建物の中に突如として現れたひとたちの姿は、代々住んだ人や土地に潜むスピリチュアルな存在を想起させる。



写真：佐藤祐介。

『加藤泉—LIKE A ROLLING SNOWBALL』
原美術館 (2019)

すべて新作で構成。木彫やソフトビニール素材は数年前から取り組んでいたが、この展覧会では、大好きな《原美術館》の空間に合わせて新作を制作し展示した。巨大なひとの四肢の先には鎖で石が結ばれている。ここからどんなイメージを想起するだろうか。



アトリエには制作中の油彩画や木彫作品が並ぶ。近年の立体作品には木彫にいくつかの既製品のフィギュアやソフトビニール製の人形を組み込んだものも。加藤は木や石などと同じように素材に接する。

若干のアップデートはあったけど、もう25年くらいそこは変わっていません。モチーフに関してはそんなにいい絵が描けると思っているから。誰か特定の対象を思い浮かべているわけではなく、点と線と面、その形を利用して人間の情報を絵の中に入れていただけなんです」と加藤は語る。

色の塗り方もほぼ当時から変わらない。油絵という下塗りをして対象物を描き、光や影を加えていく。要は絵の具を上に塗り重ねてゆき、層を作りながら描くのが一般的だが、加藤の描き方は違う。油絵の具をキャンパスに塗り込んでいくような、と彼は表現する。

「左官屋さんみたいな感じ。素材自体に色を付けて、壁に塗り込んでいくような。キャンパスのこのぼこに油絵の具を塗り込みながら、一方ですごく細かいレイアウトの調整もしている。上から絵の具を重ねて下地を殺すようなことはあまりしません。あくまで素材と対話をしながら画面を作っていくようなイメージです。それは絵だけじゃなくて彫刻も同じ、木や石、ビニール等の素材と対話をしながら制作しています。」

制作をする一日のスケジュールを聞いてみると、実際に絵の具を触り手を動かして絵を描くのは1時間程度。その他の時間はというと、「考え」て「見る」時間だ。「絵を実際に描くときは、すごい集中力が必要なんです。なので1時間とは言っても、10分描いて2時間見る。それを6セットやっていくような感じですかね」

素材と対話しながら画面を作っていく。手と脳が直結し、身体と

感覚が溶け合うように思考が指を伝ってひとのモチーフへと伝わってゆく、そんな感じなのだろうか。

2019年、東京の〈原美術館〉と群馬の〈ハラミュージアムパーク〉の2つの会場で大規模な個展『加藤 泉—LIKE A ROLLING STONE』が開催された。この展覧会は25年の活動のいわば集大成のようなものだ。東京の会場ではすべて新作。大きな木彫作品、布や石などを用いたインスタレーション、ビニール素材を用いた立体等、近年加藤が取り組む新たな素材を織り交ぜたダイナミックな構成だった。群馬の会場では、彼の初期の絵画作品から25年の活動の軌跡が俯瞰できるような構成で展示された。展示をする上で活動を振り返り、どう思ったかと聞くと、加藤はこう答えた。

「考えたことは2つ。25年やってこの程度かという思いと、こんなに飽きずに変なこともせずよく25年もやっただけという」

初期の作品からの変遷を眺めると、確かに変化しているが、ある意味ストイックに「ひとがた」を描き続けているとも言える。加藤の作品を見てみると、「生まれることができなかった魂」「異形の精霊」「首から下が退化してしまった未来人」と様々な思いが頭をよぎる。それを本人に話すと笑いながらこう答えた。

「そう見えるように作ってるからね(笑)。僕は作品に特に何のメッセージも込めてはいなくて、視覚的な造形のみで表現している。その方が作品に情報をたくさん盛り込めるからね。意味を吹っ飛ばして伝えられるものが絶対にあるから面白いんだと思います」